

第15回

Family Concert

第61回 日本音楽コンクール
第一位
受賞者演奏会

1993年6月20日(日)

PM1:20 開場 PM2:00 開演

君津市民文化ホール(中ホール)

—— 主 催 ——

清見台コンサート

—— 後 援 ——

毎日新聞社

木更津市教育委員会

君津市教育委員会

君津市民文化ホール

プログラム

◇ピアノ独奏

岡田 将

- 幻想曲 Op.49 ショパン 作曲
- スケルツォ Op.31 ショパン 作曲
- ワルツ Op.64-1 ショパン 作曲
- Op.69-1

◇フルート独奏

萩原貴子

與口理恵 (ピアノ)

- スペインのラ・フォリア マラン・マレー 作曲
- ファンタジーメランコリック ライヒャルト 作曲

————— 休憩 —————

◇ピアノ独奏

岡田 将

- 謝肉祭 Op.9 シューマン 作曲

◇フルート独奏

萩原貴子

與口理恵 (ピアノ)

- ソナタ BWV 1034 J. S. バッハ 作曲
- 組曲「アルルの女」より メヌエット ビゼー 作曲
- 精霊の踊り グルック 作曲

曲目解説

幻想曲 作品49 ショパン

ショパンは、幻想曲と題した作品をこの1曲しか残していないが、この曲は彼の全作品の中でも最高位に属するものの1つとされている。

曲は、ゆるやかな葬送行進曲風な序奏で始まり、続いて情熱的な第1主題と優美な第2主題が展開される。中間部には、トリオ（まるで祈りのような静かな部分）を置いて、再び先のドラマティックな部分が戻ってきて、そののち、終結部をもって曲は閉じられる。

スケルツォ 作品31 ショパン

ショパンは、スケルツォを4曲作曲しているが、この作品は、第2番目にあたり最も有名な曲である。技巧的にはかなりむずかしいのであるが、親しみやすいせいも、他の3作品にくらべ、よく弾かれている作品である。

曲は、弱音でまるで問いかげのようなメロディーで始まり、次いでこの上もなく美しく幸せなメロディーが展開されて、中間部にはいる。ショパンの友人であるニークスは、この部分を、「想いふけり、いぶかり、あこがれで充ちている。」と言っている。続いて再び最初の曲の部分が現れ、曲は次第に盛り上って、華麗で力強く終わるのである。

ワルツ 作品64-1（小犬のワルツ） ショパン

小犬のワルツという名で、全20曲のワルツの中でも最も親しまれている作品である。この曲は、恋人ジョルジュ・サンドのところで飼っていた小犬が、自分の尻尾を追ってくるくるまわっている様子からヒントを得て、作曲されたと言われている。

音楽は、右手のめまぐるしく回るような音の動きにはじまり、これに左手のワルツ・リズムが合わさって展開されていく。あまりに瞬時に終わってしまう所から、「瞬間の円舞曲」という名も持っている曲である。

ワルツ

作品69-1 (別れの曲)

ショパン

ショパンが、恋人マリー・ヴォジンスカに贈った曲で、楽稿には、「マリー嬢のためにドレスデン、1835年9月」と書かれている。のちに、マリーは、ショパンの作曲したこの曲を「別れのワルツ」と名づけたという。

曲は、素晴らしく旋律が優雅で、甘やかな雰囲気満ちているが、憂うつな所も感じさせ、やるせない想いが、伝わってくるようである。

スペインのラ・フォリア

マラン・マレー

マラン・マレーは、史上有数のヴィオール奏者として1679年に、ルイ14世のヴェルサイユ宮廷楽団の奏者となった。また、作曲家として、17世紀後半から18世紀前半にかけて、パリで花ひらいたフランス音楽を代表する音楽家である。

「ラ・フォリア」は、1701年にパリで出版されたもので、古いスペインの舞曲をグラウンドとした変奏曲で、原曲はヴィオールのためのものだが、マレー自身が曲集の前書きで、「ほとんどの高音旋律楽器で奏せる」と記している。

(本日はフルートで、32の変奏曲の中から10曲をお聴き下さい。)

ファンタジーメランコリック

ライヒャルト

ライヒャルトは、第2期ベルリン楽派に属し、フリードリッヒ大王の宮廷を中心に活躍した作曲家である。その頃北ドイツの作曲家からおこった、「真実で自然な感情表現を求めた結果生まれたロマンティックな色彩の濃い様式」すなわち「感情過多様式」を用いた代表者の一人でもある。

ファンタジーメランコリックもまさにそうした作品で、ピアノの抒情的な導きで始まるイントロダクションにつづき、郷愁をさそうようなテーマ、第1ヴァリエーションと第2ヴァリエーションの間におかれるラルゴなど、基本的な変奏曲の形態ではあるが、全体はあわいべールでおおわれているような感じの曲である。

19世紀フルート音楽が、最もヴォルティオーゾだった頃の作品といえる。

シューマンは、この小曲集に「4つの音符にもとづく小曲」と傍題しているが、この4つの音符とは、A(イ)、E_s(変ホ)、C(ハ)、H(ロ)、である。A E_s C Hの中のE_sは、じつはSの字がエスとよむところから、ボヘミアの小さな町 A S C H (アッシュ) という地名にあてはめたシューマンらしい遊びなのである。その頃シューマンは、この町からウィーンに来ていた少女に恋心を抱いていたという話もある。

A E_s C Hという音を基礎としたモチーフから、この一連の舞曲集が作られている。全曲は次の20曲から成っている。

1. 前口上
2. ピエロ
3. アルルカン (道化師)
4. 高貴なワルツ
5. オイゼビウス (シューマンのペンネーム・内面的な音楽の意)
6. フロレスタン (ククク・外面的な音楽の意)
7. コケット
8. 応 答 (前の曲に対する反応)
9. 蝶々
10. 踊る文字
11. キャリーナ (クララの名のイタリア風呼び方)
12. ショパン (ショパンの音楽の特質をよくつかんでいる)
13. エストレルラ (情熱的な女)
14. 再 会
15. バンタロンとコロンビーヌ (男女一對の道化役者)
16. ドイツ風ワルツ (真中に間奏曲として「バカニーニ」が出現、超絶技巧を披露する)
17. 告 白 (男女の愛の告白)
18. プロムナード (甘い気分ひたって散歩)
19. 休 息 (疾風のようにすぎる短い曲)
20. ペリシテ人と闘うダヴィット同盟の行進曲

ソ ナ タ BWV1034 J. S. バッハ

この曲は、バッハの人生の中でも一番華やかだったケーテンの時代に書かれたものである。ホ短調という味わい深い調で書かれており、華やかな時代に書かれた曲としては、何か、物哀しい感じで、バッハの内に秘めた情熱を感じる作品である。

組 曲「アルルの女」より メヌエット ビゼー

ビゼーが、フランスの文豪であるドーテの戯曲「アルルの女」のために作曲した付随音楽。その中からギローが4曲を選び組曲にした。この曲は、その第3曲目である。

精霊の踊り グルック

グルックのオペラ「オルフェウス」の第2幕で、復しゅうの女神や下界の精霊達が踊る序奏の音楽で、オペラの題材は、ギリシャ神話からとられたものである。

〈伴奏者変更のお知らせ〉

西 脇 千 花 (ピアノ)

1971年1月14日生まれ。神奈川県出身。

1989年 東京芸術大学附属音楽高等学校卒業。

1993年 東京芸術大学音楽学部器楽科卒業。

播本三恵子、堀江孝子、エルシュベット・トゥーシャの各氏に師事。

1989年 ピティナ・ヤング・ピアニスト・コンペティションG級において金賞。

文部大臣賞他、受賞。

1992年 霧島国際音楽奨励賞受賞。

第61回日本音楽コンクール 委員会特別賞受賞。